

令和元年5月23日現在

機関番号：24201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02457

研究課題名(和文) コンラッドとマグリットにおける「狂気」と「赦し」：コンラッド初期小説群の再評価

研究課題名(英文) Madness and Forgiveness in Joseph Conrad and Rene Magritte

研究代表者

山本 薫 (Kaoru, Yamamoto)

滋賀県立大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：50347431

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ジョウゼフ・コンラッドの第一作『オールメイヤーの阿房宮』(Almayer's Folly)と、画家ルネ・マグリットの同名の絵画(La Folie Almayer)に共通する狂気(folie/madness)への関心を、ジャック・デリダの言う「狂気」としての「主権なき赦し」という観点から考察することで、アラブとヨーロッパの対立と和解の可能性を探求するコンラッドの初期小説を、現代の国際社会の緊急の課題である「赦し」を先取りする革新的な物語として再評価した。今回論文にできなかった他の初期小説群については、本研究を通して発見したいいくつかの切り口を通して今後分析する予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

個人の愚行がはっきりと描き切れていないと非難されてきたために過小に評価されてきたコンラッドのデビュー作『オールメイヤーの阿房宮』を、植民地の西欧人が活躍する東洋的異国情緒に満ちた19世紀の冒険物語の亜種としてではなく、ジャック・デリダの「赦し」と(不)可能な和解の概念に依拠しながら、現代の国際社会の緊急の課題である「赦し」の問題、つまり共同体の問題を先取りする革新的な物語として再評価した。西欧の近代的自我という観点から論じられることで長く失敗作とされてきた『オールメイヤーの阿房宮』を、ヨーロッパ大陸の共同体論を頼りに、西欧キリスト教世界とイスラム教圏の和解の問題を先取りしていることを示した。

研究成果の概要(英文)：This project rethinks the meaning of the title Almayer's Folly in terms of folie as madness, through a dialogue between Conrad's Almayer's Folly and Rene Magritte's La folie Almayer. We read Conrad's first novel along with Magritte's painting with a focus on the image of the roots the two artworks have in common. In thinking of folie as madness, we draw on Jacques Derrida's notion of "pure" forgiveness as a form of madness, which forgives only the unforgivable. Unconditional forgiveness can take place, "in the face of the impossible," as we discuss, between Arabs, Malays, Europeans, Muslims and Christians in Conrad's Almayer's Folly. It may indeed be madness, on which the Belgian surrealist has also been brooding all his life in a way evocative of a mysterious gentleman in his own painting, Figure Brooding on Madness. This project gave us perspectives through which we can analyze Conrad's other earlier novels (as well as later ones) along with artists working in different media.

研究分野：英文学、ヨーロッパ文学

キーワード：ジョウゼフ・コンラッド ルネ・マグリット デリダ 赦し 狂気 西欧 アラブ 和解

## 1. 研究開始当初の背景

従来のコンラッド批評では、個人の心理を描いた「闇の奥」や『ロード・ジム』のような前・中期の心理小説群が高く評価されてきた。従って、写実的描写の点で個人に十分焦点が絞れていないと考えられてきた初期作品群は「習作」として過小評価され、未だに議論の対象になること自体が極端に少ない。本研究は、近年少しずつ変化の兆しは見え始めているとはいえ、コンラッドの作品の正典をめぐるこのような評価の固定化の一因は、英米のコンラッド批評とヨーロッパ大陸の思想との長年にわたる疎遠さにあると考える。海外の特に英語圏のコンラッド批評は、あくまで英国小説の偉大な伝統の中でコンラッドを読もうとし、もともとは東欧人で、地中海で青年時代を過ごした作家を「英国の」モダニストあるいは印象主義者として位置づける傾向が強い。そのような環境において、コンラッドの小説をジャック・デリダ等のヨーロッパ大陸の思想家の考えと抱き合わせて分析する試みは一部の研究者の間に見られるもののまだ一般的とは言えない。このような理由から、コンラッドの文学と印象派絵画を比較する試みはこれまでもなされてはきたが、コンラッドの文学を印象派の絵画以外の例えばシュルレアリスムの他の芸術媒体と比較する研究はほぼ皆無と言ってよい。

また、英米の研究の影響を受けやすい日本のコンラッド批評における研究動向もほぼ上記の通りであり、中期の傑作群以外の作品が論じられる機会は極端に少なく、コンラッドの初期物語群をまとめて論じた単著自体がない。従って、その意味では国内では本研究は次の二重の意味で初の試みである。まず、初期作品群をまとめて考察していること、そして、コンラッド作品と印象派以外の芸術（シュルレアリスムの画家ルネ・マグリット）を比較しているということにおいてである。

以上の理由から、コンラッドの初期作品を英国以外の画家やデリダのような大陸の思想家に依拠して考察する本研究のアプローチは独創的かつ革新的であり、新たなコンラッド読解及び新たなコンラッド像の発見につながる可能性を十分に保有していると言える。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、ジョウゼフ・コンラッドの第一作『オールメイヤーの阿房宮』(*Almayer's Folly*)と、シュルレアリストの画家ルネ・マグリットの同名の絵画 *La folie Almayer* に共通する狂気(*folie/madness*)への関心を、ジャック・デリダの言う「狂気」としての「主権なき赦し」という観点から考察することにより、現在のコンラッド批評の基準では主人公が十全に描かれていないために過小に評価されてきた『オールメイヤーの阿房宮』にはじまるコンラッドの初期小説群が、個人を描くことよりも、アラブ及びイスラム世界とヨーロッパ及びキリスト教文化圏の対立と和解の可能性を探求していることを明らかにすることである。このように個人(自己)から他者(共同体)へと読解の焦点をシフトすることにより、個人が描けていないと言われてきた『オールメイヤーの阿房宮』を、現代の国際社会の緊急の課題である「赦し」という他者の問題を先取りする革新的な物語群として再評価することが本研究の究極的な目的である。

## 3. 研究の方法

### <方法>

本研究は、海外及び国内にて調査・資料収集を行い、収集した資料及び関連文献という二次資料から得た知見に依拠しながらコンラッドのテキストを丁寧に精読することを基盤として、当然表現媒体の差異には配慮しつつ、文学、絵画、現代思想を横断する学際的方法を採る。絵画を技巧の点から分析するという意味での審美的方法は文学研究を専門とする研究代表者の力量を超えることでもあるので採らないが、詩的な絵画を目指し、文学や哲学に造詣の深かったマグリットの残したテキスト(言葉)を精読の対象とし、マグリットの表明した創作理念を読み解き、コンラッド文学の創作理念との共通点を探った。この方法により、画家マグリットの絵画の技法だけではなく、思索的と言われるマグリットの絵画が実演する思考と、実は思索型の芸術家でありながら素朴な船乗りのイメージが付きまとい、体系だった芸術理念を持たないと考えられてきたコンラッドの理念との共通点を見いだしながら、コンラッドの小説にあらわれる認識を明らかにする。結果として、マグリットとコンラッドの共通点である国家、人種、自己の同一性(アイデンティティの問題)についての思索に西欧キリスト教世界とアラブ・イスラム世界という二項対立とそれを切り崩す価値という現代の世界情勢に照らして考えるべき問題に接続することが可能である。

## 4. 研究成果

本研究は、従来のコンラッド批評においては過小に評価されてきたジョウゼフ・コンラッドのデビュー作『オールメイヤーの阿房宮』(*Almayer's Folly*)と、シュルレアリストのベルギー人で(コンラッドと同じく)フランス語話者の画家ルネ・マグリットの同名の絵画<<*La Folie Almayer*>>に共通する狂気(*folie/madness*)への関心を、ジャック・デリダの言う「狂気」として

の「主権なき赦し」という観点から考察することで、『オールメイヤーの阿房宮』を植民地の西欧人が活躍する東洋的異国情緒に満ちた19世紀の冒険物語の亜種ではなく、ジャック・デリダの「赦し」と(不)可能な和解の概念に依拠しながら、現代の国際社会の緊急の課題である「赦し」の問題、つまり共同体をめぐる時事問題を先取りする革新的な物語として再評価することができた。コンラッドの『オールメイヤーの阿房宮』は、主人公オールメイヤー個人の愚行がはっきりと描き切れていないために、西欧の近代的自我という考えを基盤とする海外のコンラッド批評とそれを無批判に受容する一部の日本のコンラッド批評の立場からは長く失敗作と言えないまでも習作とされてきた。しかし、これまで『オールメイヤーの阿房宮』という作品の欠点とされてきた人物造形の曖昧さを、英語圏ではなくヨーロッパの大陸の思想の他者論(つまり共同体論)の知見を基に再考することで、『オールメイヤーの阿房宮』は、従来言われてきたような初期の習作というよりは、むしろ、アラブとヨーロッパの対立と和解の可能性を探求しており、現代の国際社会の緊急の課題である「赦し」を先取りする革新的な物語であるということを示すことができた。これにより、西欧的近代個人主義に基づいたコンラッド批評(及び日本のコンラッド批評)の支配的判断基準 個人(及びその心理)がいかに深く探求されているかの偏重ぶりを浮き彫りにしつつ、それを超える新たな視座を提供することができた。ただ、マグリットの難解で謎めいた絵画論の研究に思った以上に時間がかかったため、『オールメイヤーの阿房宮』以外の初期作品群をすべて分析し、論文にまとめることはかなわなかった。しかし、シュルレアリストの画家マグリットの芸術観や理念というレンズで『オールメイヤーの阿房宮』を再読することを通して、『オールメイヤーの阿房宮』以外の初期作品群を再読する上での様々な重要なヒントや分析の切り口を発見することはできたし、複数の論文の構想が生まれた。今回論文にできなかった他の初期小説群については、本研究を通して発見したいいくつかの切り口を通して今後分析を継続し、論文にまとめる予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

1. Kaoru Yamamoto, “*La folie Almayer: Madness in Conrad and René Magritte*”, *Some Intertextual Chords of Joseph Conrad's Literary Art. Conrad: Eastern and Western Perspectives*, Edited by Wiesław Krajka (Maria Curie-Skłodowska University Press, 2019), 227-49.

2. Kaoru Yamamoto, “Burns’ Burst of Laughter: The Shadow-Line between the Arts”, *L’Epoque Conradienne: Journal of the French Conrad Society*, vol. 41 (Presses Universitaires de Limoges, 2019), 121-131.

3. 山本薫、「コンラッドとマグリットの『オールメイヤーの阿房宮』—浮遊する根のモチーフをたよりに—」『コンラッド研究』第10号(日本コンラッド協会、2019)、51-81.

〔学会発表〕(計 3 件)

1. Kaoru Yamamoto, “Burns’ Burst of Laughter: The Shadow-Line between the Arts (International Joseph Conrad Conference “Between Texts and Theory: Transnational Conrad” University of Limoges, France & Société Conradienne Française, with the support of Associazione Italiana di Studi Conradiani 21-22 September, 2017)

2. Kaoru Yamamoto, ‘*La folie Almayer: Madness in Conrad and René Magritte*’, The 6th International Joseph Conrad Conference, Maria Curie-Skłodowska University, Lublin, Poland, 20- 24, June 2016.

〔講演〕

3. 山本 薫「コンラッドとマグリットの『オールメイヤーの阿房宮』—浮遊する根のモチーフをたよりに—」(京都府立大学英文学会、2016年10月30日、京都府立大学)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年：  
国内外の別：

○取得状況（計0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

(1)研究分担者 なし

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者 なし

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。